



脈管が拓く、
健康長寿の未来

第67回 日本脈管学会学術総会

2026年10月15日(木) ~ 16日(金)

会場 | 神戸ポートピアホテル

会長 | 村上 卓道 神戸大学大学院医学系研究科
内科系講座放射線医学分野 教授

事務局長 | 山口 雅人 神戸大学医学部附属病院
放射線診断・IVR科/IVRセンター 特命教授

学会事務局
神戸大学大学院医学系研究科 内科系講座放射線医学分野
〒650-0017 兵庫県神戸市中央区楠町7-5-2

運営事務局
株式会社コングレ北海道支社
〒060-0807 北海道札幌市北区北七条西5丁目5番地3 札幌千代田ビル 4階
TEL : 011-839-9260 FAX : 050-1702-1620

<https://www.congre.co.jp/jca2026>

学術委員会企画シンポジウム

下肢静脈疾患における治療の現状と問題点

シアノアクリレートによる下肢静脈瘤治療 - 最新エビデンスと臨床応用-

西の京病院血管外科 今井崇裕

06680

抄録

下肢静脈瘤治療は、2011 年の血管内焼灼術(ETA)の保険収載以降、ストリッピング術から低侵襲な血管内治療へと大きく変化した。さらに 2019 年にはシアノアクリレートによる血管内塞栓術(cyanoacrylate closure: CAC)が保険収載され、熱を用いない新たな治療選択肢として広く普及している。

CAC は Tumescent Local Anesthesia (TLA)を必要とせず、神経障害や皮膚熱傷などの熱関連合併症を回避でき、術後疼痛が少なく早期社会復帰が期待できる点が大きな利点である。国際的にも良好な治療成績が報告されており、我々が実施した国内 12 施設前向き多施設レジストリでは、術後 1 年閉塞率 92.6%(GSV 95.0%、SSV 90.2%)と良好な治療成績が得られ、疼痛は軽度で、Venous Clinical Severity Score (rVCSS)および Aberdeen Varicose Vein Questionnaire (AVVQ)は有意に改善し、CAC が解剖学的成功のみならず臨床症状・QOL 改善にも寄与することが示された。

しかしながら、CAC には遅発性過敏反応、血栓性静脈炎など接着材特有の有害事象が存在する。さらに近年、我々は重症シアノアクリレート肉芽腫を経験し、異物肉芽腫が急速に進展して複数回の外科的切除を要した症例を報告した。この経験は、生物学的製剤による免疫修飾がシアノアクリレートに対する異物反応の重症化に関与する可能性を示唆しており、術前の免疫学的背景の評価と長期フォローアップの重要性を提起している。

本講演では、国内外の最新ガイドラインとエビデンス、自施設ならびに多施設共同研究の成績をもとに、CAC の適応、治療成績、有害事象への対応、ETA との使い分け、さらに免疫学的合併症を含めた今後の課題と展望について概説する。

学術委員会企画シンポジウム

下肢静脈疾患における治療の現状と問題点

静脈疾患に対する圧迫療法 - エビデンスに基づく適応と実践 -

西の京病院血管外科 今井崇裕

抄録

圧迫療法は、慢性静脈疾患(CVD)、深部静脈血栓症(DVT)、静脈性下腿潰瘍(VLU)など幅広い静脈疾患に対する基本的治療であり、静脈還流の改善、静脈高血圧の軽減、浮腫の改善、微小循環の正常化を介して症状軽減と組織修復を促進する。近年、日本静脈学会「静脈疾患における圧迫療法ガイドライン 2025」が刊行され、圧迫療法の適応と実践がエビデンスに基づいて体系化された。本講演では、ガイドラインの 10 のクリニカルクエスチョン(CQ)を軸に、静脈疾患における最新の推奨とその問題点を解説する。

圧迫療法の有効性は多くのエビデンスにより確立されているが、その治療効果は適切な使用、装具の選択、圧迫圧の設定、患者アドヒアランスに大きく左右される。さらに、医療関連機器圧迫創傷(MDRPU)など有害事象への対応など、安全かつ効果的な圧迫療法には標準化された知識と技術が不可欠であり、それらを実現するためには患者教育と継続的な支援が重要となる。

本講演では、最新ガイドラインと国際的エビデンスを踏まえ、圧迫療法の基礎から実臨床での適応、圧迫圧の選択、継続率向上の工夫までを整理し、静脈疾患診療における圧迫療法の最適化について考察する。今後は個々の病態に応じた個別化圧迫療法と患者教育を組み合わせることで、治療成績および QOL のさらなる向上を目指した診療戦略を提案したい。